

## 漱石の見た明治社会の風潮

越智悦子

(一)

漱石は『文學評論』の中で、文学と社会一般との關係を論じて、次の様に述べている。「文學は社會的現象の一つであつて」「社會は文學丈で成立した者ではない。美術なり、哲學なり、社會の風俗なり、一般に云ふ大いなる人間の歴史中の一部分として文學が出現したのである」「文學は當時の一般の氣風が反射される者で當時の趣味の結晶した者であるから一般の社會とは密接の關係がある。従つて、「活きた世の中から活きた文學が自然と活現して来る」様にするためには、「社會全體の有様を敍して其全體が動いて居る中に自然に文學が織り込まれて居る様にする」方法を取れば良い。

ここで漱石は、文學は社会から切り離しては考えられぬこと。文學を生きた活動するものとして扱うためには、その文學の置かれた生きた社会を捉え、他の社会的要素との関連の中で生み出され、結晶させられて行ったものとして

の文學を見る必要がある事を述べている。

この様に「文學は社會現象の一つである」と考えていた漱石であつて見れば、彼が作品を創作する際には、自分の文學と社会との關係を念頭に置いていたはずである。周知の如く漱石の作品は、濛虚集に収められた中世ヨーロッパを舞台とする二、三の浪漫的香りの高い短編を除いては、全て明治の社会を舞台として書かれている。この事は、漱石自身が自分の作品について、「僕のはいつでも自分の心理現象の解剖であります」と語っている様に、自分自身を一人の人間として客觀的に解剖し、觀察し得た人間心理を小説に書き写すということを通して、人間というもの、及びその人間の集合によつて形作られる社会と、そこに存在する、歪<sup>こま</sup>とを見極めようとした漱石にとっては当然の事であつた。

そこで、この論稿では漱石が文學を事とした當時に於て、彼が明治社会を如何なるものとして捉え、分析していたの

かを考察し、作品の社会背景の源泉となるべき漱石の、明治<sup>々</sup>に対する考えを探ってみたいと思う。

(一)

漱石は、明治四十四年、三月十六日・十七日東京朝日新聞に「マードック先生の日本歴史」と題する評論を掲載している。

この評論について解説を加えてみると、「マードック先生」とはイギリスの日本研究者、ジェームス・マードックの事である。彼は明治二十三年に来日し、中津中学校教師、第一、第四、第七各高等学校の英語講師として教鞭をとり、傍ら日本史の研鑽を積み、前後三巻の『日本歴史』を著わしている。のちに帰国後、メルボルン大学の日本学教授となった人物である。<sup>(註2)</sup>

漱石は、第一高等学校の学生として、マードック氏から英語や歴史の授業を受けたのである。その当時の様子は「博士問題とマードック先生と余」<sup>(註3)</sup>と題する記事の中で回顧されている。漱石は、その性質の「如何にも淡泊で丁寧で、立派な英國風の紳士と極端なボヘミアニズムを合併した様な殊の人格を具へ」た先生を敬愛していた。漱石の門下生で、後に第七高等学校に奉職し、マードック氏と同僚となった野間眞綱に宛てた明治四十一年六月十四日の書簡

にも「マードックさんは僕の先生だ。近頃でも運動に薪を割つてるかしらん。英國人もあんな人許だと結構だが」と紹介している。

このマードック先生と漱石とは、明治四十四年二月の漱石の博士号辞退事件を契機として、音信を復活した。その結果、マードック氏の「新刊第三巻」<sup>(註4)</sup>の冒頭にある緒論をとくに思慮ある日本人に見て貰ひたい」という依頼によって、氏の著作『日本歴史』を朝日新聞紙上で紹介したが、評論「マードック先生の日本歴史」である。

この評論は、マードック氏が如何なる契機により日本の歴史に興味を抱き、研究し、その著作を公にするに至ったかを紹介すると同時に、氏が西洋人の視点でもって最も興味を抱き、叙述した維新前後の五十年間の日本の豹変に対する、漱石自身の見解と、その豹変の生み出すであろう今後の日本の運命に対しての、漱石の未来観とを加えて述べたものである。

この中から漱石が、明治という社会を如何に見ていたかを抽出してみると、まず漱石はその冒頭部に於て「維新の革命と同時に生れた余から見ると、明治の歴史は即ち余の歴史である。」と述べている。これは、漱石にとっての時代、漱石にとっての生きた社会とは、明治<sup>々</sup>そのものであるという意識を明言したものである。

そして、自分の眺める明治という時代、その社会を次の様に続けている。少し長くながるが引用してみる。「悲しいかな今の吾等は刻々に押し流されて、瞬時も一所に逗留して、吾等が歩んで来た道を顧みる暇を有たない。吾等の過去は存在せざる過去の如くに、未来の爲に蹂躪せられつゝある。

吾等は歴史を有せざる成り上りものゝ如くに、たゞ前へ前へと押されて行く。財力、腦力、體力、道徳力の非常に懸け隔たつた國民が、鼻と鼻とを突き合せた時、低い方は急に自己の過去を失つて仕舞ふ。過去などは何うでもよい、只此高いものと同程度にならなければ、わが現在の存在をも失ふに至るべしとの恐ろしさが彼等を眞向に壓迫するからである。」「吾等は渾身の氣力を擧げて、吾等が過去を破壊しつゝ、斃れる迄前進するのである。しかも吾等が斃れる時、吾等の烟突が西洋の烟突の如く盛んな烟りを吐き、吾等の汽車が西洋の汽車の如く廣い鐵軌を走り、吾等の資本が公債となつて西洋に流用せられ、吾等の研究と發明と精神事業が畏敬を以て西洋に迎へらるゝや否やは、どう己惚れても大いなる疑問である。」

これらの言葉を考察してみると、まず、漱石は明治という時代を、ある巨大な力に「押し流されて」いる時代であると捉えていた事がわかる。それでは、明治の日本社会を押し流している巨大な力とは一体何であったか。それ

は後半に日本の対象として比較されている、「西洋」がそれである。つまり漱石は、明治という時代を西洋から押し寄せて来た近代文明の波にのみ込まれ、押し流され、翻弄されつつある社会であると見ていたのである。

そして、この瞬時もとどまる事を許さぬ潮流に押し流されつつある明治の社会を、「悲しいもの」と眺めていた。漱石がなぜ「悲しいもの」と見ていたかは以下に述べられている。それは、開花の進歩の遅れていた日本にとっては、数倍の進歩を遂げていた西洋文明の潮流は、どう足掻いても抗しがたい巨大な威力であり、日本はただ流されて行くより他になす術がない程の差をつけられている低い国であったという事実である。そして更に、このただ流されて行くかざるを得ないという事象が、日本が自己を失うという事であり、それまで自力で築いて来た自己の過去を破壊して行く上に、かろうじて進められている、即ち自己喪失の状態を示すものである、という自国日本の姿に対する感慨であった。この開化の程度に差のある国が、独立した国家として生存して行くためには、数段高い所から巨大な力で流れ込んで来る西洋文明の潮流に押し流されて行かざるを得ない。そのただ押し流されざるを得ないという事象が、日本の社会にとっての過去から継続された正常な発展を不可能にし、必ずや何らかの「歪」を生ずる。それが解って

いながら、にもかかわらず、現実の力の差の前には如何ともなし難く、ただ否応なしに「押し流され」ざるを得ないという事実を、漱石は「悲しいかな」と表白したのである。

そして、こうした悲しい必死の前進がもたらす犠牲を漱石は鋭く見抜いていた。漱石に言わせれば、「焦慮に焦慮で、汗を流したり呼吸を切らしたり」して「ただ前へ前へと」西洋の後を追いつつ「押し流され」ている「吾等は」「恐るべき神経衰弱」にかからざるを得ないと言う。そしてその「恐るべき神経衰弱」は「ペストよりも劇しき病毒を社會に植付けつゝある」と言うのである。ここでは漱石は、「ペストより劇しき病毒」と呼んだものについては、何も言及していない。ただ明治の社會が担わされた、西洋文明の潮流に非常な勢で押し流されるという風潮がそこに生ずる、社會の歪を指摘するに留まっている。この、社會の歪の、実体については、次掲の資料を用いて考察したいと思う。

漱石は、更に、こうした、社會の歪を被りながらも、宿命的に前へ前へと進んで行く明治の社會に対して、その行き着く先は西洋に対する敗北でしかないと考えていた。先に引用した様に、漱石は「吾等が斃れる時、吾等の烟突が西洋の烟突の如く盛んな烟りを吐く」とは考えられぬと言う。即ち、産業に於て、明治の社會はどうてい西洋に

追い付く事はできぬと言うのである。また、「吾等の汽車が西洋の汽車の如く廣い鐵軌を走」るとは考えられぬという。即ち、文明の利器の開発、生活の開明に於て、明治の日本はとても西洋の水準に達する事は不可能であると言うのである。更には、「吾等の資本が公債となつて西洋に流用せられ」る事は考えられぬと言う。即ち、西洋の近代社會を目指し、その近代資本主義經濟社會をひたすら追いつく求め、明治の日本社會が西洋の經濟と肩を並べて、西洋諸國から、円に對する信用をかち得るに足る程の經濟機構を確立する事は、とうていできぬ相談だと言うのである。そして最後に、「吾等の研究と發明と精神事業が畏敬を以て西洋に迎へらるる」事などはとても考えられぬと言う。即ち、社會の物質的側面に於て敗北する明治日本社會は、それならば、科学的發達に於て、學術的方面で、また人間存在を内面から支える文學、藝術、その他の精神文化の方面に於て、西洋を凌駕できるかという、それともても期待はできぬと言うのである。

要するに、漱石は、吾等明治の日本人が、維新までの歴史に於て日本独自の力で發展して来た過去を破産しながら、社會の歪という大きな代償を支払いながら、西洋近代文明の潮流に押し流された結果、産業、生活程度、經濟といった物質的方面に於ても、また、學術研究、文芸といった精

神的方面に於ても、日本の社会が西洋に倂して行ける様になるとは、とても期待できぬ。日本の明治社会に於ける必死の開化への努力は、結果として西洋に対する敗北に終るしかない。という判断をその未来に対して下しているのである。それを漱石は、「吾等は吾等の現在から刻々に追ひ捲られて、吾等の未来を斯の如く悲観してゐる。『余は』」  
「先生の著書を紹介するの序を以て、吾等の運命に關しての未來觀をも一言先生に告げて置きたいと思ふ。」と、日本の未来に対する自らの見解が、大變悲觀的なものである事を述べて、この評論を結んでゐる。

以上、評論「マードック先生の日本歴史」に於て、漱石の叙述した明治社会に対する彼の見解をまとめてみると、漱石は明治の社会を西洋から押し寄せて来た近代文明の潮流に悲しくも否応なしに押し流され、自らの過去を破壊しつつ、社会の歪を生じながら、脇目も振らずただ前へ前へと西洋を目掛けて進んでいる社会と見てゐる。そして、その結果を予測して、明治の日本社会が西洋に倂する所まで発展する事は不可能であると判断してゐた。漱石は、明治の開化の世を決して喜ばしいものではない。諸手をあげて開化々々と謳歌していられる様なものでもない。大變苦々しい、悲惨なものであると見ていたのである。

## 二

右に考察した漱石の明治の日本社会に対する見解は、明治四十四年八月、和歌山で行なわれた講演「現代日本の開化」の中で、明治社会の果たした「近代文明開化」という点に焦点を当てて、より論理的に、明確に整理されて語られてゐる。

そこで、次に、この「現代日本の開化」を通じて、漱石の明治社会に対する考えを考察してみたい。

この講演は、その演題の示す通り、現代、即ち漱石が現代として生きた、明治に於ける、日本の開化という事について、その如何なる性質のものであるのかを漱石が解説してみせたものである。

まず漱石はこの演題を選んだ理由について「あなた方も私も日本人で、現代に生れたもので、過去の人間でも未来の人間でも何でもない上に現に開化の影響を受けて居るのだから、現代と日本と開化と云ふ三つの言葉はどうしても諸君と私とに切つても切れない離すべからざる密接な關係がある（傍点引用者）」そこで、この現代の日本の開化というものを解剖し、その如何なるものであるかについての私見を述べたい、と始めてゐる。

ここで漱石は、現代、即ち当時の明治の世が「開化の影響を受けて居る」と明言してゐる。漱石は、明治という時

代の真只中であつて、自分たちが西洋の近代文明開化の影響下に日々圧迫されている現実をひしひしと感じていたのである。

時代のただ中に生存している人間にとって、その時代の流れ、その流れに組み込まれ、流されている自分の姿は見えにくいものである。それは、漱石の言葉を借りて言うならば、「必竟吾等是一種の潮流の中に生息してゐるので、其潮流に押し流されてゐる自覺はありながら、斯う流されるのが本當だと、筋肉も神経も脳髓も、凡てが矛盾なく一致して、承知するから、妙だとか變だとかいふ疑の起る餘地が天から起らない（前出「マードック先生の日本歴史」）からである。漱石にとって明治という時代は、先にも述べた様に「明治の歴史は即ち余の歴史である。」と感じられる時代であつた。従つて彼自身が述べている如く、「余自身の歴史が天然自然に何の苦もなく今日迄發展して來たと同様に、明治の歴史も亦尋常正當に四十年を重ねて今日迄進んで來たとしか思われぬ（同）」ものであつた。

漱石が、明治という時代の流れを右の如く感じていた事は事實であろう。しかし、ここで誤解してはならないことは、この「尋常正當に」「進んで來た」という言葉の意味である。ここに漱石の言う「明治の歴史」が「尋常正當に」「今日迄進んで來た」とは、明治という時代が何の波瀾も

動乱もなく、何の喪失も犠牲もなく、何の曲折も歪もなく、穏やかに進んで來たという意味では決してない。そういう異変、異常のない時代という意味に於ての「尋常正當」ではないのである。つまり、この「尋常正當」とは、そうなるべくしてなつた、自然の勢として、そうならざるを得なかつた、という所に、尋常、さを認めたものなのである。時代の風潮というものは、その時代の人々にとっては抗し難い、どうにもならぬ力で流れて行くものである。急激な西洋文明の移入によつて、日本文化及び日本人の精神に歪を生じながらも、非常な勢いで生活様式を変え、思想を変え、社会を変えて行く事が明治という時代の宿命的な時代風潮であつた。それ以外の道を明治という時代は取り得なかつたという意味に於て、その風潮が明治という時代の、尋常、であつた、というのである。くり返して言うが、その明治の風潮の意味が、尋常正當、であつたという意味では決してない。

それどころか、漱石は、この、尋常正當に流れる明治の風潮の、異常、さと、この異常さの人々に与える影響とを、誰よりも鋭敏に感じ取つていた作家であつた。<sup>(註5)</sup>それを漱石は「現に開化の影響を受けている。」と表現したのである。

こうした漱石には、その、異常、さに気付く事なく、西

洋文明の尻馬に乗り、その輸入文明に陶醉し、生活の開けて行く事に單純に浮かれ、それをあらゆる面に於ける進歩と信じ、日本の新文明として謳歌していた一般の人々が、はがゆく危険なものに思われたに違いない。それ故に、漱石は「私は現代の日本の開化といふ事が」「一般の日本人に能く呑み込めて居ない様に思ふ」と述べ、「御互に現代の日本の開化に就て無頓着であつたり、又は餘りハッキリした理會を有つてゐなかつたならば、萬事に勝手が悪い譯だから、まあ互に研究もし、又分る丈は分らせて置く方が都合が好からうと思ふのであります」と前置きをして、自分の考える明治の開化というものの実体を語つて行く。漱石は、自分に見えていた当時の社会、即ちこの新文明を受け入れた明治の社会が、如何に不安定で軽薄なものであり、この新文明の日本人精神にもたらした結果が如何に危険な、悲觀的なものであるのかを、いくらかでも知らしめ、人々を啓蒙したいと考へたのに相違ない。

そこで、講演「現代日本の開化」を順を追つて考察してみると、漱石は、明治の日本の開化の実体、その特色を話す前に、一般の開化というものに対して「先づ開化の定義から極めて懸りたい」と述べ、次の様に定義を下している。「開化は人間活力の發現の経路である。」これが漱石の下した定義である。

続いて漱石は、この定義を解説して「人間の活力の發現上」に「積極的のもの」と「消極的のもの」との「根本的に性質の異つた二種類の活動」がある。この二種類の活動が「外界の刺戟に對して」起こす「反應」の集積が「吾人類の生活状態」であつて、「其生活状態の多人數の集合して過去から今日に及んだものが所謂開化に外ならない」と述べている。

そして、この二種類の活動とは、外界の刺戟に對して、「活力を成るべく制限節約して出来る丈使ふまいとする」「活力節約の行動」と、「自ら進んで適意の刺戟を求め能ふ丈の活動を這裏に消耗して快を取る」「活力消耗の趣向」とであると言う。これらの二活動を具体的に説明すれば、前者は「義務といふ言葉を冠して形容すべき性質の刺戟に對して起る」、「願くは此義務の束縛を免かれて早く自由になりたい」「出来るだけ勞働を少なくして可成僅かな時間にも多くの働きをしやう」という気持ちから生ずる「活力節約の工夫」であり、後者は、「道樂と名のつく刺戟に對して起る」「積極的に活力を任意隨所に」「消耗して嬉しがる方」の活力發現である。要するにこの開化の二大原動力を構成する二つの活動の發現の結果が、一方では「汽車汽船は勿論電話自動車」といった「怪物の様に辨腕な器械力」となり、また一方では直接には「活計向とは關係」のない「贅澤なもの、數」を殖やし、進んでは「文學」

「科學」「哲學」の發展となつて現われているのである。

以上の様に、開化」という現象の實體を分析して、二種の活力、即ち「出来るだけ勞力を節約したい」という願望から出て来る種々の發明とか器械力とか云ふ方面と、出来るだけ氣儘に勢力を費したいと云ふ娛樂の方面」とが「經となり緯となり千變萬化錯綜して現今の様に混亂した開化と云ふ」「現象が出来る」のである、と説明した漱石は、この一般の開化というものに対して、最後に痛烈な批判を加えている。

それは、この二種類の活力が「長い時間に工夫し」その「猛烈な奮闘」で開化を勝ち得た結果が、我々の生活は昔と比べて少しも楽になつてはいない。それどころか「開化が進めば進む程競争が益劇しくなつて生活は愈困難に」なつていのではないか、と言うものである。即ち、開化の結果を眺めてみると、開化の我々人間に与えてくれたものは生活程度の向上という事のみであつて、生存の苦痛は依然として解決されてはいない。「生存競争から生ずる不安や努力に至つては決して昔より楽になつてゐない。」という事實の指摘である。

漱石はその實體を説明して、「昔は死ぬか生きるか」の競争であつたのに比べて、今は「生きるか生きるか」の競争であると言う。つまり、昔は、死”に對する、生存”と

いう事それ自体のための必死の努力であつたのに對して、現代ではその競争は、「Aの状態で生きるかBの状態で生きるか」という、より楽な状態、より快適な生活、より贅沢な楽しみを求めるための競争に変化した。そして、その競争は人間の本来的に有している傾向であつて、際限のないものである。従つて、開化というものは、その程度の進めば進む程「積極消極兩方面の競争」をますます激しくせずにはおかない、という趨勢を持つ。そうである以上、開化の發展した社会に於ける「生活の吾人の内生に與へる心理的苦痛」は、決して軽くなるものではない、と言うのである。この現實を漱石は「開化の産んだ一大パラドクス」と呼んでいる。

ここでわかる事は、漱石の目には一般の開化（内発的に順当に發展した西洋の文明開化）の持つ否定的側面が明瞭に見えていたという事である。即ち漱石は、あくまで人間の我儘な欲求を満足させるための近代西洋文明は、その場その場の物質的欲求を充足させる事はできても、人間の肉面的精神に満足をもたらす事はできない。それどころか、一つの物質的欲求の充足は次の不満足を生じ、生活欲はますますエスカレートし、生存競争の激化は一層の内的精神の墮落を促している、という事を英文学への深い造詣や、英國留学などを通して鋭く感じ取つていた。そうした漱石

は、ここで、開化によって發展させられる生活程度の向上と、その物質的充足を手に入れたはずの人間の内的精神との相関を指摘し、近代西洋文明がそのはなやかな開化の裏面に有する欠陥を剔抉して見せたのである。

この様に一般の開化が危険な欠陥を持っているのに加えて、明治の社会が経験した日本の開化には、更に「一種特別な事情」があった。それを解説して、そこに存する問題点を提示してみせるのがこの講演の主眼である。

漱石は、「日本の開化」の特色を一言で言えば、「西洋の開化（即ち一般の開化）は内發的であつて、日本の現代の開化は外發的である」と断じている。そしてこの断案を説明して、「西洋の開化は行雲流水の如く」に「内から自然に出て發展」して来たものであるが、それに比べて日本の開化は「外からおつかぶさつた他の力で已むを得ず一種の形式を取」つたものである。それを詳しく説明すれば、明治の日本は「鎖港排外の空氣で二百年も麻酔した」所へ、突然、「数十倍努力節約の機關を有する開化で、又数十倍娛樂道樂の方面に積極的活力を使用し得る方法を具備した開化」の「刺戟」を受けて「跳ね上」り、その圧迫に「今迄内發的に展開して来たのが、急に自己本位の能力を失つて」「急劇に曲折し始めた。」これが明治に於ける「日本の開化」である。そして、その圧迫は一時的なもの

ではない。「時々には押し切られて今日に至つた許りでなく向後何年の間か、又は恐らく永久に今日の如く押しされて行かなければ日本が日本として存在出来ない」圧迫である。そのため「此壓迫によつて吾人は已を得ず不自然な發展を餘儀なくされる。」即ち「開化のあらゆる階段を順々に踏んで通る餘裕を有たない」上滑りの開化を形成している。こういう状況を指して、現代（明治）日本の開化を、外發的」と呼んだのである、と解説している。

ここで漱石は、「マードック先生の日本歴史」の節でも述べた様に、明治の社会を西洋の近代文明開化の潮流に押し流されている社会であつて、かつそれは「否應なしに其云ふ通りにしなければ立ち行かない」「已を得ず不自然な發展を餘儀なくされ」ている、吾人の力ではどうにもならない社会である、という実態を展開してみせたのである。

そして続いて、この外發的開化が明治社会に生んだ、歪を解説する。即ち前節に述べた「ペストよりも劇しき病毒」「恐るべき神經衰弱」の実体についての解説である。

それは、「外發的の開化が心理的にどんな影響を吾人に與ふるか」という問いに対する解答として論じられている。漱石が明治の日本の開化の曲折について、ひいてはその曲折の生み出す社会の歪について論じる際に、右の問いを發する事から始めたという事は、漱石は明治社会の被った新

文明開化による。歪<sup>こ</sup>を、明治の社会に生息している人々、即ち漱石を含めた「吾人」の「心理的」歪として捉えていたという事である。

この事を念頭に置いて講演を眺めてみると、まず漱石は、正常な開化の発展の有り方を説明するのに、その推移の過程を人間の「意識の連続」という事を用いて説明する。即ち、人間の心は絶間なく動いている「意識」の連続したものであって、その意識の動きは「孤線」を描いているという。これを具体的に言えば、あるAの意識は、はっきりと意識されない前の暗い意識の下から、一定の時間を経て頂点へ上ってはつきりとAを意識し、それが次のBの意識に取って変わられるにつれて意識の方向が下へ向いて、再びぼんやりと暗くなつて行く。この孤線の動きがAからBへ、BからCへと順次連続して動いているのであると説明する。そして、この意識の動きは個人の意識のみならず、「一般社會の集合意識」でも「十年の間の長時間に互」る意識でも同じである。そこで、この動きを「集合の意識や、又長時間の意識の上に應用して考へて見」ると「人間活力の發展の経路たる開化といふものの動くラインも亦波動を描いて孤線を幾個も繋ぎ合せて進んで行く」ものである。即ち「一言にして云へば開化の推移はどうしても内發的でなければ墟だと申上げたいのであります」と結論する。

ところが、翻つて「現代日本の開化」を考えてみると、その開化はそれまでの日本の内發的に進んで来た開化とは断層を持った外發的の開化である。即ち明治の「開化を支配してゐる波は西洋の潮流」なのである。従つて、「その波を渡る日本人は西洋人でないのだから、新しい波が寄せらる度に自分が其中で食客をして氣兼ねしてゐる様な気持ち」にならざるを得ないし、その上、その潮流は従來の開化に比して数十倍の複雑の程度を有しているため、新しい波が寄せる度に日本人は、「今しがた漸くの思で脱却した舊い波の特質やら眞相やらも辨へるひまのないうちにもう棄てなければならなくなつて仕舞」う。「恰も天狗にさらはれた男の様に」「其経路は殆んど自覺」する暇なく、次から次へと「無我夢中で飛び付いて行」かざるを得ない状態に陥つていと分析する。そして、最後の結論を、「斯う云う開化の影響を受ける國民はどこかに空虚の感がなければなりません。又どこかに不満と不安の念を懐かなければなりません。」と下すのである。この結論がこの講演の主眼であった。

ここでわかる様に、漱石は吾人の心理的歪を大きな二つの点から捉えている。

その一つは、明治の新文明が西洋からの輸入文明であり、自己本位の能力を欠いている事、即ち自分自身の歴史の流

れの中から発展させて来たものではないがために、自己に根ざした安定感を持ち得ていないという現実である。この「自己本位」の欠如という問題はこの新文明の渦中に明治の社会人として実際に生きた漱石が、自分自身の問題として、自己の存在意義を獲得、確信するために長い間苦悩した問題であった。その事は、大正三年十一月二十五日、学習院で行なわれた講演「私の個人主義」の中で詳しく述べられている。ここでは紙面の都合上詳しく触れる事はできないが、漱石が自己本位という理念を獲得した時の事を述べた部分を引用して置きたい。「私は此自己本位といふ言葉を自分の手に握つてから大變強くなりました。彼等何者ぞやと氣概が出ました。今迄茫然と自失してゐた私に、此所に立つて、この道から斯う行かなければならないと指圖をして呉れたものは實に此自我本位の四字なのであります。」「其時私の不安は全く消えました。」漱石にとって自己本位は、生存上なくてはならぬ最大の存在意義であった。明治の社会は、その大黒柱としての意義を欠いた社会であったのである。それが漱石の目には見えていた。否、自分自身の問題として感じ取っていたのである。

もう一つは、数十倍の高度をもって怒濤の如く押し寄せて来る西洋文明に対して、明治の社会が取らざるを得なかった移入方法、つまり必然的に革新に次ぐ革新を旨まぐる

しい程の急速さで実演して行った事による不安、不満足感である。即ち、明治の社会に於ける新文明は、おのずから誕生し、成熟し、爛熟した結果退廃し、次の新しいものに取って変わるといった継続という、根をはった根本的な強さを持たぬ切り花文明であり、社会はその切り花を次から次へと新しい花に差し換える事だけで精一杯の社会だったのである。その輕桃浮薄の切り花しか持たぬが故に、人々は無意識のうちに足が地についていない不安と、不満足とを感じていたはずである。少なくとも、漱石自身は明治人として大變な不満足を感じていた。それを漱石は、「一言にして云へば現代日本の開化は皮相上滑りの開化である」と断じたのである。

しかし、この皮相上滑りは当時の日本の現状からは、「事實已むを得ない」事であった。明治の日本社会は、その程度の力しか持っていなかったのである。それをもし、上滑りでない発展にしようとするならば、西洋に於ける発展年限を十分の一縮めるのである以上、活力は十倍に増さなければならぬ。その結果、深刻な神経衰弱に陥るは必至である。漱石は言う。そして、最後にこの講演をまとめて、要するに一般の開化というものそれ自身が、如何に進歩しても、「吾人の幸福は野蠻時代とさう變りはない上に、日本の特殊の状況から現代日本の開化は「機械的に變化を

餘儀なくされる爲にたゞ上皮を滑つて」いるのであり、滑るまいと思つて踏張る爲に神經衰弱」になつて行くのであるから、「どうも日本人は氣の毒と言はんか憐れと言はんか、誠に言語道斷の窮狀に陥」っているのであると述べている。

これらの吾人の心理の歪に象徴される様に、漱石は新しく起つた明治の社会を、自己本位の能力を失い、輕佻浮薄に流れる、不安定で不満足な社会と見ていた。この「どうすることも出来ない、實に困つたと嘆息する丈で極めて悲觀的の結論」が、漱石の明治社会に下した結論なのであった。

こうした、明治の社会に対する漱石の考え、即ち、西洋からの圧迫に押し流され、人々に精神の困憊を来しながらも、どうする事もできずにただ前へ前へと必死でありながら空虚な努力を余儀なくされているのが明治の社会である、という社会觀から生まれたのが、不安な人間群である所の『それから』の代助であり、『行人』の一郎、『明暗』の津田といった主人公たちであつたのである。

註1 P116 大正三年一月十三日畔柳都太郎宛書簡

註2 P117 漱石全集第十一巻注解参照(岩波書店版)

註3 P117 明治四十四年三月六・八日『東京朝日新聞』掲載

註4 P117 第一巻の誤り。この漱石の誤解については「マードック先生の日本歴史」の冒頭に述べられている。

註5 P121 「文明開化の性格」中村光夫(『文学界』昭和一九年一月号)参照  
(岡山県立邑久高等学校教諭)

### 研究室受贈圖書雜誌目錄Ⅶ

野州国文学 第二十六号、第二十七号(国学院大学栃木短期大学)

山口国文 第四号(山口大学)

山辺道 第二十五号(天理大学)

緑岡詞林 第五号(青山学院日文学院生の会)

論究日本文学 第四十四号(立命館大学)